

戦車兵

富岡 喜美子 さん

⁽¹⁾徴兵検査で近衛兵に選ばれた彼は、「近衛兵なのでは、なまぬるい」と志願して戦車兵になりました。

戦後40何年も経って調べた結果「戦車第二師団第六連隊」とわかりました。戦中は部隊名など兵士の家族には全然わかっていませんでした。

昭和19年1月に大阪に入隊、1週間後満州^{ぼつり}勃利へ。8月12日勃利出発、8月30日釜山出発、9月10日門司港出発、それからの途中では、アメリカ潜水艦の攻撃に悩まされながら、無事に9月30日ルソン島に上陸、各地を転戦、20年1月末「戦車第六連隊は犠牲となってムニオスの町を死守せよ」との師団命令により、何日間かムニオスにとどまって、米軍の包囲による猛爆を受けながら戦っていました。

ルソン島に上陸した米軍の進路を阻み、日本の軍隊や、一般邦人達の退路を確保する為の防御



陣地としてのムニオスにおける戦車第六連隊に対し、優勢な米軍の爆撃は凄まじいものであったそうです。

連日黒煙の上るムニオス方面を見ていた友軍の兵士たちは、「あの黒煙の下で戦車第六連隊は、果たして存在するであろうか」と祈りながら見ていたのだそうです。

その後20年2月6日「敵の包囲を突破して5号国道を北上せよ」と命令変更になり、戦車をすぐ移動できるように準備しようとしても、連日の爆撃により戦車のキャタピラは土に埋もれた状態になっていて、非常に困難を極めたとのこと。7日未明に出発した

ところ待ち構えていた米軍によって、戦車は全部⁽³⁾ 擱座^{かくざ}、生き残った兵は徒歩で脱出したのだそうです。

ちなみに戦車第六連隊は総員908名で生還者56名、戦死者852名のうち、ムニオス脱出のとき実に344名の戦死者が出たそうです。戦車兵の彼もその時戦死ということになっています。

戦車第六連隊の防御戦闘は「世界でも稀^{まれ}な戦例と言える」と図書館で読んだ本にも書かれていました。またムニオス脱出後、大変な御苦労ののち生還された方より送られた資料によりますと、陸上自衛隊富士学校の教科書のコピーにも、その時のムニオスにおける戦車第六連隊の守備戦闘の内容が、日付け入りで23ページにわたり詳しく書かれていました。

南方で戦死された人の最後の様子は、一般の人はほとんど何もわかりませんので、戦車兵のお父さんは戦後、息子の戦死の状況が知りたくて、⁽⁴⁾ 引揚援護局へ足繁く通い「またあんたですか」と言われながら、いくらたずねても結局何もわからなかったと聞きました。そのお父さんは、毎年欠かさず春の靖国神社大祭におまいりされていましたが、⁽⁵⁾ 79歳のとき「来年からはもうよう来ないからネ」と言って帰られたと聞きましたので、私が調べてみようと思いました。

新聞記事などでルソン島から生還された人のことが載っているのを手がかりに、次々とおたずね^{つい}して終に戦車第六連隊の上官の人が、神戸市にお住まいで、軍の資料など整理されていることを知ることができました。戦後、40年以上経っていましたが、その方と何度もお便りを交わし、数々の資料も送っていただきました。

お父さんは息子が大阪へ入隊の時、門まで送って行かれたと聞きましたので、それからのことを詳しく手紙に書き、ムニオス脱出のときの隊列のことまで、長い長いお手紙を書きました。私の書いた長い長いお便りを読まれたお父さんは、その手紙を家族にも見せないで、1人で燃やされたそうです。後日家族の方のお話しで察することができました。それからのちにお父さんは亡くなられたことを知りましたが、私の手紙がお父さ

んを死なせる結果になったのでは・・・と、今も気になっています。

この文章を書きました「私」は「生まれたときからいいはずけ」でありまして、現在
89歳、数え年で90歳になります。

-
- 1 徴兵検査...一定の年齢に達した者に対し、兵役に服する資質の有無を判定するために身体・身上を検査すること。
 - 2 退路...逃げ道。
 - 3 擱座...戦車などが壊れて動かなくなること
 - 4 引揚援護局...内地(樺太・沖縄・千島を除く)以外の地域から内地に引き揚げる者などに対し、応急保護や検疫などを実施するために設置された事務所。
 - 5 春の靖国神社大祭...靖国神社(国家のために尊い命を捧げられた人々の御霊を慰め、その事績を永く後世に伝えることを目的に創建された神社)で行われる春季例大祭(神霊を慰め、平和な世の実現を祈る)のこと。